

審査の結果の要旨

氏名 山田 裕貴

景観とは、人間が自然を含む他者と相互に関係を結びながら生を営み続ける、その総体が環境化されたものであり、かつその環境の姿あるいは眺めである。従前の景観研究は、環境化されたその状態を時空間の両面から客観的に記述しようとする人文学・地理学的立場、環境の視覚像がなんらかの価値を生成するという現象に着目してそれを解明しようとする工学的立場に、大きくは二分される。しかしいずれも、人間の継続的な営みにより景観が生成し変容するダイナミックなメカニズムを記述もしくは解明する、という景観の本質に切り込めてはいない。

本論文は、その方法論の基礎を前述二者のうち人文学・地理学的立場におきながら、共同体という人間の営みの単位に着目して、景観変容のダイナミズムに迫ろうとしているという点で、きわめて野心的である。急傾斜地が多く棚田の耕作形態が卓越した地域である大分県竹田市を対象に、その農村景観を、用水路や頭首工・分水施設などの農業土木施設（モノ）、生産活動とそれに伴う農事（コト）、およびそれらを運営してゆく単位である共同体（ヒト）、の三者の関係がつくりだすものと考えて、農業土木施設や農事の近代化にしたがって共同体のありかたに生じた変化を、実証的に論考している。また、共同体を単独的なものとしてではなく、哲学者の内山が提唱している共同体理論である多層的共同体の概念を援用している点、多層的共同体の構造をセミラティス構造とし、近代化によってツリー構造へ移行するという解釈も、本論文の独自性である。第一章では、上記の内容を論文の背景として述べている。

第二章では、大分県竹田市の地形や地質、水系、近世における稲作の歴史を整理している。中でも、一級河川から普通河川や準用河川まで大小様々な河川を網羅的に把握しプロットした図は、それらを水源とする広域な井路網を把握するうえで重要な資料としての価値を有するものである。

第三章では、二次資料、現地踏査、ヒアリングにより 101 に及ぶ井路と共同体の存在を把握し、土地改良区、水利組合、地縁的共同体の 3 種に共同体のあり方を大別している。本成果は、竹田市の井路を網羅的に把握した点において資料性が高く評価に値する。同時に、施設や耕作方法が近代化されても、従来の共同体の形態である水利組合が圧倒的に多く存続している点から、共同体は必ずしも一様に近代化されていない事実を明らかにしている点は注目され、また、取水

地から受益地までの距離や地質、その起源が近世由来か近代由来か等の分析も行っており、竹田市の井路の特徴を包括的に論じる上できわめて有用な材料を提示している。

第四章では、用水路や頭首工、分水施設などの農業土木施設（モノ）、生産活動とそれに伴う農事（コト）、およびそれらを運営してゆく共同体（ヒト）に関する近代化の過程を、第三章で把握した 101 の井路について明らかにし、表に整理している。この成果は単に資料的価値を認められるのみならず、モノやコトが近代化されても、ヒトすなわち共同体が一様に近代的に組織化されるわけではないという事実を伺い知る事ができ、本論文における最も重要な知見のひとつと言える。

第五章は、ケーススタディに充てられている。二次資料と現地踏査、ヒアリングをもとに、羽恵地区、岩瀬地区、巢原地区の三地区における農業土木施設（モノ）や農事（コト）の近代的変容と多層的共同体（ヒト）の再組織化の過程を整理した上で、多層的共同体が再組織化していくダイナミズムをモノ-ヒト-コト三者の関係性から明らかにしている。その関係性として、農事（コト）の近代化による地域固有の共同体（ヒト）の消滅や、農業土木施設（モノ）の近代化によって共同体（ヒト）を消滅させるには至らないものの、共同体（ヒト）の意味合いを弱めさせるといったモノやコトの作用による外的要因と、共同体（ヒト）内の人口減少による集約化や、新たな共同体の誕生といった共同体（ヒト）の作用による内的要因がある事を明らかにしている。中でも特筆すべきは、平成に入ってから新たな共同体が誕生する場合、セミラティス構造として再組織化されるメカニズムが働いている事を明らかにしており、現在においても三地区共にセミラティス構造を有しているという指摘は、農村景観の近代化を考察するうえできわめて示唆に富むものである。

第六章では、第五章の分析を基に多層的共同体が何故保たれたのかを考察している。羽恵地区と巢原地区においては機械の利用や集落への関心から新たな共同体が誕生し、岩瀬地区においては旧河道の存在影響して井路が統合されなかった事を考察し、多層的共同体を形成した再組織化のメカニズムは、物理的（外的）な要因というよりはむしろ、共同体の意味的（内的）な要因によって維持された事を実証的に述べている。

以上概観したように、本研究の最も評価すべき点は、竹田市全体における井路と共同体の存在を網羅的に把握し、近代的変容の全体像を整理した資料性の高さと、その上で、三地区において農業土木施設（モノ）、共同体（ヒト）、農事（コト）の三者の関係を基に、農業土木施設（モノ）や農事（コト）の近代化にしたがって共同体（ヒト）のあり方に生じた変化である再組織化のメカニズムを個別に解明・記述した点にある。これは景観の生成・変容のダイナミズムを、モノ-ヒト-コト三者の関係性に着目して記述することを試み、一定の成果を得ているという意味で、今後の景観研究全般へ寄与するところがきわめて大きいものと評価すべきである。よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。